

聖書：ヨハネの黙示録 14：6～13

説教題：行いがついて行く

日時：2021年6月13日（朝拝）

13章では竜（すなわちサタン）が第一の獣と第二の獣を用いて教会を厳しく迫害することについて語られましたが、先週見た14章最初の部分では神の民の上にある完全な守り、その最終的な救いの確かさに関する幻が示されました。地上を見つめる限り、そこに救いはないかのようです。獣すなわちこの世の国家権力を悪魔は悪く用いて教会を激しく迫害します。しかし天を見上げた時、ヨハネが見たのは子羊キリストがシオンの山、救いの山に立っておられること、そしてその子羊のもとに神の民144,000人もともにいるという光景でした。つまり地上でどんなことがあろうと神の民は一人も欠けることなく守られるということ、そして必ず勝利の状態、救いの最終状態に至るということでした。その幻に続いていよいよ歴史の最終局面に関わる幻が示されて行きます。ヨハネはまず3人の御使いが中天を飛んでメッセージを告げ知らせる様子を見ます。中天とは空を見上げた時に見える広い空間のことです。地上ではなお獣が支配しています。しかしその彼らの届かないところ（中天）に御使いが来て、地に住む者たちへの最終警告を伝えます。

まず第一の御使いが来た時の様子が6節に記されています。「また私は、もう一人の御使いが中天を飛ぶのを見た。彼は地に住む人々、すなわち、あらゆる国民、部族、言語、民族に宣べ伝えるために、永遠の福音を携えていた。」永遠の福音とは永遠に変わらない福音、あるいは人々の永遠の運命に関わる福音という意味でしょうか。彼は大声で言います。「神を恐れよ。神に栄光を帰せよ。神のさばきの時が来たからだ。天と地と海と水の源を創造した方を礼拝せよ。」 「神のさばきの時が来た」という言葉から、いよいよ神のさばきが近いこと、歴史の最終局面に達していることが分かります。彼は「神を恐れよ。神に栄光を帰せよ。」と叫びます。それは世の人々、地に住む人々はそうしていないからです。ローマ人への手紙1章21節に、世の人々は「神を神としてあがめず、感謝もせず」、他のものを拝み、それに仕えていると記されています。前の13章で人々は獣と獣の像を拝んでいました。すなわちこの世の国家権力を拝み、これに第一の忠誠を誓っていました。当時で言えばローマ皇帝こそ我らの守り手であり、救い主であると、皇帝自らが「主にして神」と人々に呼ばせたように、そのように皇帝を礼拝していました。しかしそうではなく、すべての創造者、天と地

と海と水の源を創造した方を礼拝せよと天使は言います。これは最終警告、ラストチャンスです。

すると次に第二の御使いが現れて言います。8節:「倒れた、倒れた、大バビロンが。御怒りを招く淫行のぶどう酒を、すべての国々の民に飲ませた都が。」大バビロンという言葉は黙示録で初めて出て来ましたが、これは何でしょうか。詳しくはこの後17章以降に記されます。しかしここで特に説明もなく出て来ているということは、黙示録の最初の読者には何を意味するかすぐに伝わったからだと考えられます。バビロンと言えば思い出されるのはイスラエルを捕囚したあの旧約時代のバビロンです。当時の世界帝国です。あのバビロンは神の前に誇り高ぶり、自らを神であるかのように考え、行動しました。ダニエル書4章30節に、バビロンの王ネブカドネツアルの次の言葉が記されています。「この大バビロンは、王の家とするために、また、私の威光を輝かすために、私が私の権力によって建てたものではないか。」このバビロンは過ぎ去りましたが、以後バビロンは高慢で神に逆らって立つ帝国の代名詞となりました。黙示録の時代で言えばローマ帝国を指すことは明らかでした(ペテロの手紙第一5章13節参照)。またこれはローマ帝国ばかりでなく、世の終わりまで繰り返される神に逆らって立つこの世の都市やそのシステムを指します。

そのバビロンの都について、8節に「御怒りを招く淫行のぶどう酒を、すべての国々の民に飲ませた」と言われています。この「淫行のぶどう酒」とは何でしょうか。これについて後に語られる18章3節が参考になります。「すべての国々の民は、御怒りを招く彼女の淫行のぶどう酒を飲み、地の王たちは彼女と淫らなことを行い、地の商人たちは、彼女の過度のぜいたくによって富を得たからだ。」ここに「御怒りを招く淫行のぶどう酒」という言葉が出て来ます。そしてそれを飲んで彼女すなわち大バビロンと淫らなことを行った人たちについて「彼女の過度のぜいたくによって富を得た」と言われています。これを読むと、この中心にあるのは経済的なことだったろうと考えられます。ローマ皇帝を拝み、ローマに忠誠を誓う当時のシステムに乗っかって、その繁栄にあずかり、経済的な祝福を得るようになることです。その後の18章9節でも「彼女と淫らなことを行った人たち」のことが「ぜいたくをした人たち」と言われています。ですから、ローマとうまくやって行けば祝福にあずかれる。この世と調子を合わせ、この世のシステムに乗っかって生きる方が得策。そこに繁栄がある。そのように誘われる人は神よりもこの世を大事にします。それを自らの神とします。し

かし第二の御使いは、この大バビロンが倒れた！倒れた！と予告します。自分たちに祝福をもたらしている大バビロンがまさかの崩壊に至る。この世の栄えは、その繁栄の真ただ中で終焉を迎えます。神を無視し、端っこに追いやったこの世のシステムは倒壊し、すべてが成り立たなくなります。そのさばきが来た！と御使いは言います。

そして9節以降では第三の御使いが来て言います。獣とその像を拝み、その刻印を受けた者たちの上に恐るべき最終的さばきが臨むと。10節に「その者は、神の怒りの杯に混ぜ物なしに注がれた、神の憤りのぶどう酒を飲み、聖なる御使いたちと子羊の前で火と硫黄によって苦しめられる」とあります。「混ぜ物なしに」とは、他のものが加えられて薄められることなしにということでしょう。つまり神の怒りが少しも和らげられず、そのままその人に注がれる。「火と硫黄によって」とは、あのソドムとゴモラのさばきを思い起こさせます。これは地獄の苦しみを象徴するヘブル的表現です。そしてここで心に留めるべき重大な真理は、11節に「彼らの苦しみの煙は、世々限りなく立ち上る」とあるように、その苦しみは永遠に続くということです。最後のさばきを受けて滅ぼされると聖書で言われる時、それは消滅し、存在がなくなることを意味しません。聖書は苦しみが永遠に続くと言っています。11節後半に「だれでも獣の名の刻印を受ける者には、昼も夜も安らぎがない」とある通りです（20章10節や15節も参照）。彼らは永遠の苦悩の状態に置かれる。神を捨てて高ぶり、この世を謳歌し、富を得、この世で安らいでいた者たちに待っているのは「昼も夜も安らぎがない」というさばきであり、報いなのです。

以上のことに基づく神の民、聖徒たちへの励ましのメッセージが12～13節にあります。まず12節に「ここに、聖徒たち、すなわち神の戒めを守り、イエスに対する信仰を持ち続ける者たちの忍耐が必要である」とあります。これは13章10節や18節と同じようなまとめの言葉、また励ましの言葉です。「忍耐が必要」というメッセージは、この黙示録のテーマメッセージと言えます。この12節は前の部分とどういう関係にあるのでしょうか。当時のクリスチャンたちも困難の中で、この世と妥協する誘惑がありました。皇帝礼拝に形だけでも屈した方が良いのではないかと。それ以外、生き延びる道はないのではないかと。しかしそうではないことを3人の御使いは告げました。この世にならって歩む者たちの行きつく最後は今見て来た通りです。大バビロンは倒れます。「倒れた！倒れた！」と言われるほど、それは確実に間もなくのことです。また獣を礼拝し、その刻印を受けた者たちは恐ろしいさばきを身に招きます。こ

の彼らが刈り取るものを見て、なお忍耐の道を進め！と12節は言っているわけです。その忍耐は12節にある通り、神の戒めを守り、イエスに対する信仰を持ち続けることに現れるべきものです。一時的な繁栄を約束するこの世の淫行のぶどう酒を飲んで、結局滅びを刈り取る者とならないように、この警告を受け止め、むしろ励ましを受け取って、信仰の忍耐へと進め！と12節は語ります。

そして13節は積極的な側面からの励ましです。ヨハネはここで天からの声がこういうのを聞きました。「書き記せ、『今から後、主にあつて死ぬ死者は幸いである』と。」御霊も言われる。「しかり。その人たちは、その労苦から解き放たれて安らぐことができる。」 「書き記せ！」とあるのは、これが非常に重要な言葉だからでしょう。「主にあつて死ぬ死者」とは、主を信じ、主と結ばれて地上を歩み、死ぬ人のことです。その幸いの中身について「その人たちは、その労苦から解き放たれて安らぐことができる」とあります。これは天国では何の働きもないということではありません。天国には神の栄光を現し、神を永遠に喜ぶ多くの活動があります。ここで「解き放たれる」と言われている「労苦」とは、この世で信仰を守り通すための苦難とか迫害とか戦いとか、それに伴う苦勞のことです。そういった疲れ、辛さ、苦しみを覚える生活が終わりとなるのです。そしてその人々は「安らぐ」と言われています。これは11節と対比されています。獣に従う者たちはやがての日に昼も夜も安らぎがありませんが、主にある者たちは安らぎます。第3版まで、ここは「休む」と訳されていましたが、これは永遠の安息、待ち望んだ究極的な祝福の状態に入ることでしょう。

そして最後に「彼らの行いが、彼らとともにいて行くからである」と13節後半にあります。ここに地上での信者の行いが永遠の将来において重要な意味を持つことが述べられています。ある人は「行い」について語られているこのような聖書の言葉に出会うと疑問を感じます。聖書は救いは行いによらないと述べていたのではなかったか。ただキリストへの信仰によって救われるのではなかったのかと。確かにその通りです。しかし私たちはこれを、まるで聖書が行いを不要だと教えているかのように捉えてはならないと思います。エペソ人への手紙2章8～9節を参照すると、救いは行いによらず、ただ信仰によることが次のように述べられています。「この恵みのゆえに、あなたがたは信仰によって救われたのです。それはあなたがたから出たことではなく、神の賜物です。行いによるものではありません。だれも誇ることをないためです。」しかし次の10節でキリスト者の行いが次のように位置づけられています。「実に、私

私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをあらかじめ備えてくださいました。」ここから分かることは私たちの救いは行いによらず、ただ信仰によりますが、その信仰に生きる人は必ず良い行いに自分自身を表すはずであるということです。良い行いは救いの条件ではありませんが、救いのエビデンスとなるものです。イエス様と真につながって生きる人に必ず現れて来るものであり、信仰に生きていることの証明とさえなるものです。その行いがついて行く！と言われていました。救いは行いによらないからと言って、天国へ入る時、地上での良い行いは切って捨てられるのではない。それはむしろ天国へ一緒に入るのです。そしてその人は良い行いがついて来た人として、最後の審判を経てふさわしい人として認められ、「安らぐ」と言われる状態に入ることになるのです。

私たちはここから改めて行いに現れる信仰を求めなければ！と教えられます。ここで特に考えられているのは、迫害や困難の中での信仰の歩みです。心で信じていれば良いのだからと言って、行いは多少どうでも良いとは聖書は言いません。内側に確かなものがあるなら、それは外側にも現れて来るものでなければならぬ。その意味で行いは重要です。困難な状況でも、主を信じる信仰告白と、それとセットになった外側の生活が必要です。そうするならその人の行いは死んだ後もその人について行く。神の前で永遠に覚えられ、称賛されるものとなるのです。これはもちろん迫害という特殊な状況に関わらず、すべての生活において言えることです。私たちの行いは私が本当に主とつながって生きているかどうかの証しとなるものです。主の救いを本当に感謝し、主を愛して歩んでいるかの目印となるものです。それは必ずしも他の人の目に評価されるとは限りません。しかし主に感謝し、主を愛してささげる私たちの応答の生活(すなわち行い)は、神に喜ばれ、やがての世界にもついて行くというのです。一方、私たちがこの世でどんなにお金持ちになっても、お金は次の世に持って行けません。それは私たちについて来ません。この世の社会的名声や業績、学歴、美貌、・・・そういったものも天国で価値を持つものとはならず、この世に捨て置くことになりま。果たして私たちはどれだけ次の世に持って行けるもの、自分について行くと言われるものを持っているかと問われるものです。

改めて行いの大事さ、いや単に行いと言うのではなく、行いに現れ出る信仰の大切さを覚えたいと思います。世の様々な誘惑がある中で、この世と妥協し、この世が与

える淫行のぶどう酒を飲み、やがてさばかれる者でなく、主の救いを感謝し、主にこそ信頼している者たちとして、主に喜ばれる生活へ進む者たちでありたいと思います。私たちの歩みは地上にある限り不十分で、欠けだらけで、罪の染みがそこここに入り込んでいますが、それが主への信仰と愛から出ているなら、主はそこに良いものを見て取って、良くやった！と称賛してくださる。わたしとの真実な関係に生きた証拠だと言って尊んでくださる。私たちとしては、そう言われたとしても、とても誇れるようなものではなく、ただあなたの恵みによってわずかばかりなさせていただけたことですと告白するしかないものなのですが、神は愛の証しとして喜んで受け入れ、永遠に記憶し、祝福してくださいます。私たちの地上の行いは、このような意義を有していることを覚えて、信仰を行いに表すこの幸いに生きる者とされたいと思います。そしてやがての日に、その行いが私たちについて行くという祝福に生き、そのことで神にすべての賛美と栄光を帰し、その者に約束されている真の安らぎ、永遠の安息へと入る神の民の歩みへ導かれて行きたいと思います。